

ヒトラーと第二次世界大戦

栗原 優
| 著 |



知性のヒトラーと激情のヒトラー

それぞれが、いかに軍事力の形成と爆発にかかわってきたか。
第二次世界大戦を構造的に解明する。

はじめに

本書は第二次世界大戦をヒトラー中心に分析したものである。私は第二次世界大戦を「ヒトラーの戦争」だつたと思つてゐる。本書を「ヒトラーと第二次世界大戦」と題したのは、その意味においてである。私が何よりも興味を懐くのは、ヒトラーの戦争たる第二次世界大戦にはヒトラーという人間が消し難く色濃く塗りこめられてゐるという事である。私は本書において、そのことを明らかにしようと思ふ。そのことを通じて、第二次世界大戦がヒトラーの戦争であったことを立証しようと思ふのである。

ヒトラーという人間は非常に頭の鋭い理性的な人であると同時に抑えきれない激情の男でもあつた。「ヒトラーの戦争」である第二次世界大戦にはそのようなヒトラーの人間そのものが深く刻み込まれてゐる。

第二次世界大戦の中核をなしたのは独ソ戦である。独ソ戦はヒトラーが第一次世界大戦前のドイツ帝国主義論争から引き継いで独自に発展させた「戦争目的」から生じた。それはソ連を征服して東方に広大な「生存圏」を獲得するというものであつた。イギリスと結んで背面の安全を確保しつつ、ソ連を攻撃しようとするものであつた。反共主義を反ユダヤ主義に結びつけて、ソ連を攻撃しようとするものであつた。

しかし、それにとどまるものではない。本書で明らかにするうちに、ヒトラーの帝国主義は、それまで異民族支配の体制として存在した帝国主義を異民族絶滅の体制にしようとするものであつた。第二次世界大戦をとくに悲惨なものにしたのは、何よりもこの「戦争目的」であり、そこから生じた戦争であつた。一二〇〇万人、ある

いは、二七〇〇万人というソ連人の犠牲者を出したのはこの戦争だったし、六〇〇万人のユダヤ人の大虐殺が行われたのは、まさにこの独ソ戦のさなかにおいてであった。

本書がヒトラーの「戦争目的」の形成過程の分析から始めるのはまさにそのためである。以下で明らかにするように、ドイツ帝国主義論争の中から生じたヒトラーの「戦争目的」は合理的なものであり、理性的なものであった。しかし、それは人道を無視した理性であった。ヒトラーは理性的なところにおいて、もつとも残忍であり、酷薄だったのである。私は何よりもそれを明らかにしようと思う。

しかし、「ヒトラーの戦争」はそのような理性的なものだけではない。第二次世界大戦の発端そのものが、ヒトラーの傲慢で激情的な性格によって決定的に色づけられていたのである。ヒトラーは理性的な人間であると同時に、抑えきれない激情的な男でもあった。以下で明らかにするように、第二次世界大戦の開戦のきっかけとなったポーランド侵略に際して決定的な役割を果たしたのは、決してヒトラーの「理性」ではない。ミュンヘン会談で頂点に達した「イギリス憎し」の激情である。ヒトラーの「傲慢」な性格とその「激情」である。それが、イギリスと結んでソ連を撃つというヒトラー元来の計画と正反対に、独ソ不可侵条約によってソ連と結んで英仏と対立しながらポーランドを撃つという第二次世界大戦を勃発させたのである。「理性」は疑いもなく一定の役割を果たしていた。しかし、決定的だったのは「非理性」であった。

しかしながら、第二次世界大戦の真の開幕を告げたのは、ドイツのポーランド侵略ではない。それはきっかけに過ぎない。本書が明らかにするように、第二次世界大戦の真の発端をなしたものはヒトラーのフランス侵略である。ヒトラーの考えからすれば、それは彼の「戦争目的」である対ソ攻撃の第一歩であった。実に、独仏戦争こそが独英戦争を経て独ソ戦争に至る過程でのヒトラーの役割こそ、第二次世界大戦を「ヒトラーの戦争」にした中心的な出来事であった。本書の分析の中核はそこに置かれている。注目すべきは、この過程で決定的な役割を

果たしたのは、単純な理性でもなければ単純な非理性でもない。その両者が組み合わさった「ギャンブル」精神である。「ギャンブル」精神は単純な非理性ではない。「ギャンブル」に出たって人は理性的に計算に計算を重ねる。しかし、最後の決定は非理性に委ねられるのである。

本書の論議は、ソ連を打倒して英仏を対決することになった時、一時は英仏に味方しているという現実に向かい、英仏が短期間で勝たねばならない。しかし、イギリスは短期で勝てる道なレヒコにもなかった。ヒトラーは「レヒコ」の平和志向に賭けて、フランスを短期間で打倒した後にはイギリスと和平してソ連を攻撃することの勝手な道筋を立ててフランス打倒に踏み切ったのである。一つのギャンブルであった。しかし、ヒトラーが対仏戦争を開始したその日には、イギリスは主戦派のチャーチルを首相に立てた。ヒトラーのギャンブルは最初の日には失敗したのである。

独ソ戦開戦に至って、ヒトラーは理性的に計算に計算を重ねた、しかし、最終的な決定は彼の理性的な考慮の域外にあった。独ソ戦の「戦争目的」はドイツ帝国主義論争を引き継いだ彼の理性的な考察から生じた。しかし、その実行は独英戦のさなか独ソ戦を開始するという、背腹に英ソという巨大な大国を敵に持つ危険な正面戦争として行われたのである。それはヒトラーが理性的に考えたことになかった大ギャンブルだった。結局、彼は正面戦争のギャンブルに失敗して、英ソ米三大国の巨大な軍事力に包囲されて自殺したのである。

戦争というものは結局のところ、人間が引き起こしたものであり、人間の心が引き起こしたものである。人間の心と心が相争い殺し合う人間行動の極悪の形態である。戦争の理解は結局のところ人間の理解に到達するのであり、私か第二次世界大戦の理解にヒトラーという人間の理解を中心にするのはその意味においてである。

しかし、実際のところを言うと、ヒトラーの戦争を具体的に最終的に規定したのは、ヒトラーの理性と非理性だけではない。そのどちらでも、両方でもない。人間の理性と非理性を実現するための手段としての軍事力とい

う冷厳な客観的事実である。戦争が何よりも軍事力の衝突であることは言うまでもないことである。しかし、これまでの第二次世界大戦研究においてそのことが十分に意識されてきたとは言えない。軍事力は人間行動の結果でありながら、結局、独裁者ヒトラーにしてもどうにもならない厳然たる客観的事実であった。ごく簡単に言えば、ヒトラーは理性に負けたのでもなければ、激情に負けたのでもない。軍事力に負けたのである。

ヒトラーは一九三九年九月、イギリスに対抗した軍備大拡張五か年計画をわずか九か月で打ち切ってイギリスと開戦しなければならなかった。ここから生じた軍事力の決定的な劣位がその後のヒトラーの戦争政策に致命的な影響を与えた。そして、独ソ戦に際して、独英戦を背後に持つ二正面戦争のギャンブルに失敗して、英ソ米三大国の巨大な軍事力に包囲された時、ヒトラーの敗北が決定されたのである。私は、ヒトラーの理性と非理性が、それを実現する手段としての軍事力の形成と爆発にいかにかかわってきたか、その有様を明らかにしようと思う。結局、私はこの、ヒトラーの理性と非理性と軍事力という三つの要素を組み合わせることによって「ヒトラーの戦争」たる第二次世界大戦を「構造的」に理解しようと思うのである。

本書はこれまでの諸研究に多く依存するとともに、新事実の提供を基礎にしたそれらに対する批判的対応を中心にしている。それについては、詳しくは本書の「附章 研究史と主要文献について」の項目を参照されたい。

はじめに

vi

第一部 ヒトラーと第二次世界大戦の勃発

第一章 ヒトラーの対外政策思想

- 1 初期ヒトラーの政治思想 3
- 2 ドイツ帝国主義の二つの道 7
- 3 ヒトラー対外政策思想の形成 13

第二章 ドイツ再軍備と英独同盟構想の挫折

- 1 ドイツ再軍備の進展 35
- 2 再軍備の停滞 38
- 3 英独同盟構想の挫折 44

第三章 ミュンヘンへの道

- 1 ヒトラーの戦争計画 51
- 2 独境合併 56
- 3 ミュンヘン協定の成立 68

第四章 第二次世界大戦の勃発

- 1 ミュンヘン後のヒトラー戦略 83
- 2 軍備大拡張計画 94
- 3 大戦の勃発 105

第二部 ヒトラーと第二次世界大戦の展開

第一章 独ポ戦をめぐる

- 1 独ポ戦 133

2	ポーランド占領政策	142
3	奇妙な戦争	154

第二章 独仏戦をめぐる

1	独仏戦をめぐる	159
2	「弾薬の危機」とトットの登場	179
3	独仏戦を控えて	191
4	独仏戦の展開	197

第三章 独英戦か独ソ戦か

1	独英和平か独英戦か	215
2	ゼーレーベ作戦をめぐる	215
3	バトル・オブ・ブリテン	225
1	反英天同盟か	238
		253

第四章 独ソ戦の展開

1	バルバロッサ作戦の成立	265
2	独ソ戦の開始	265
3	独ソ戦の展開	282
1	軍需生産「大混乱」	289
5	ソ連占領政策	320
6	ユダヤ人絶滅政策の成立	343
7	日本の参戦	359
		397

第三部 世界大戦の拡大とヒトラーの転落

第一章 「枢軸」の凋落

1	世界大戦の拡大とヒトラー	427
2	スターリングラードの悲劇	441

3	クルスク大戦車戦	459
4	イタリアの脱落	467

第二章 シュペーアの「奇跡」

1	シュペーアの登場	475
2	シュペーアの改革(一)	481
3	シュペーアの改革(二)	488
4	国民生活と食糧問題	498

第三章 ホロコースト

1	ヨーロッパ・ユダヤ人絶滅政策の開始	509
2	アウシュヴィッツ	518
3	ワルシャワ・ゲットー蜂起	530
1	絶滅政策の終了	537

第四章 ドイツ第三帝国の最期

1	ノルマンディー上陸作戦	549
2	ヒトラー暗殺未遂事件	563
3	ケッヘルス「総力戦総監」になる	582
1	アルナヌの戦い	597
5	ドイツ陸軍の崩壊	615
6	ヒトラーの死	633

おわりに

附章 研究史と主要文献について

文献目録・あとがき・人名索引

〈著者紹介〉

栗原 優 (あしはら ゆう)

1936年 生まれ

1960年 東京大学教養学部教養学科卒業

1964-66年 西京大学(現在の同志社大学)に在籍

1967年 東京大学大学院社会学研究科国際関係論専攻修士課程修了

1968-72年 大阪外国語大学客員講師・助教授

1972-99年 神戸大学文学部助教授・教授

1999-2008年 創価大学文学部教授・特任教授
現在 神戸大学名誉教授・創価大学名誉教授(学生時代、東京大学、同志社大学)

主著 『日本人の体制と戦後』 三省堂出版局(2001年) ISBN978-4-381-51191-1 2007年

『第二次世界大戦の勃発』 名古屋大学出版会(2004年)

『日本人のレジスタンスと戦後改革』 三省堂出版局(2005年) ISBN978-4-381-51191-1 2007年

『現代世界の戦争と平和』 三省堂出版局(2007年) ISBN978-4-381-51191-1

MINERVA 西京史ライブラリー

ヒトラーと第二次世界大戦

2023年3月30日(初版)第1刷発行

縦書き略

定価は表紙の
表示をご覧ください

著者	栗原 優
発行者	杉田 啓三
印刷者	藤森 英夫

発行所 株式会社 ミネルヴァ書房

607-8491 京都市山科区日ノ岡塚谷町1
電話代表 075-581-5191
振替口座 01020-0-8076

©栗原優, 2023

亜細亜印刷・新生製本

ISBN 978-4-623-09484-4

Printed in Japan